

律令陵墓制の特質について

— 陵戸の考察を通じて —

石井輝義

キーワード

律令 陵墓制 陵戸 守戸 神戸 喪葬制 良賤制

はじめに

日本古代の喪葬制を明らかにする上で、看過することのできない問題として、「陵墓」をあげることができる^①と考へる。「陵墓」に関する研究は、膨大であり、数え上げれば、枚挙にいとまがない。特に、「近年の陵墓研究の隆盛には目を見張るものがある」と指摘されるように^②、それらが造営された当該期を対象とする日本古代史だけでなく、広く日本史の中で、考古学、文献史学、さらには民俗学など、さまざま側面から、多くの論点が提示されている。古代史

の文献史学からは、「陵墓を律令国家・天皇の出現と明確に関連づける視点」が提示され、研究の深化が著しいといっても過言ではない。

そのような中にあっても、「陵墓」に関する研究は、未だ検討の余地が残されているように思われる。「陵墓制」の創設期にあつては、ことに、その守衛者である「陵戸」との関連では、未だ多くの課題が残されているように思われてならない。そこで、本稿では、「陵墓」に関して、その成立という点に着目し、守衛者との関係の中で、可能な限り、私見を示してみたいと思う。

一、延喜諸陵寮式について

陵墓に関する史料、特に、陵に関する史料は、天皇に関する史料であるにもかかわらず、断片的なものが現存するに過ぎない。『延喜式』所載の諸陵寮式は、これまでの陵墓研究において、最も多くの研究が出されていると言っても過言ではないだろう。しかし、この『延喜諸陵寮式』においても、主な記載は、陵墓を列挙した陵墓歴名に留まっているといわざるを得ない。

その記載の特徴に関しては、和田軍一氏の研究に依拠して進められてきたと言つて良いと思う。和田氏の指摘は、次の三点に要約できる。

（1）陵墓歴名は、神功皇后を除き、天武天皇までは、即位したとされる天皇に限定されており、天皇の崩御に準じる形で記されている。

（2）草壁皇子の真弓丘陵から平城皇后である藤原帶子の河上陵までは、歴代順に記載されているとはいえ、崩御順とは言えない。

（3）清和天皇の母である藤原旅子の宇波多陵から、宇多天皇の皇后である藤原温子の後深草陵までは、天皇や皇后の崩御順や歴代順に準拠していないが、存置順が一致している。

和田氏のこの分類は、「おそらく動かない」とも指摘されるように、通説的な位置を占めていると言つて良いと考へる。時野谷滋氏は、和田氏の分類に基づいて、さらに、重要な指摘をされている。和田氏が言われた（1）のうち、神代の山陵を除けば、即位天皇だけを記録していることを指摘された。しかしその中には、神功皇后陵を含んでいる。神功皇后が当時は即位天皇と同じ扱いをされていたとする点は、やや課題を残すと思う。時野谷氏は、「当時」を持統期段階と想定されているが、『日本書紀』では、神功皇后の他、日本武尊や飯豊皇女、厩戸皇子も、「陵」と表記されている。

持統期では、日本武尊や飯豊皇女も即位天皇と認識されていた可能性は、否定できず、神功皇后のみが一人、陵墓歴名に「陵」として記載されることは、やや疑問と言わざるを得ない。しかし、そのような中にあつても、諸陵寮式の（1）の実質的な成立、後の改制に影響を受ける部分を除いて、持統五年以前に完成した歴名をそのまま継承していると指摘された点は、重要である。喪葬令集解先皇条所引の古記説の「除即位天皇以外、皆稱悉墓」に準拠しており、持統崩御を待たない、それ以前の段階で陵墓歴名の成立を指摘されている。具体的にはその時期を、「陵戸」に関する詔が出された持統五年とされている。

これに対して北康宏氏は、歴名の成立段階に基づいて、和田氏とは異なった分類を提示された。⁹⁾

A 神武天皇から、平城皇后である藤原帶子の河上陵まで。

B 神代の日向埃山陵と日向高屋山上陵、日向吾平山上陵の三陵。さらに清和天皇の母である藤原旅子の宇波多陵から、文徳天皇の生母である藤原順子の後山科陵まで。

C 藤原沢子の中尾陵から、宇多天皇の皇后である藤原温子の後深草陵まで。

このうち、最も大きく異なるのは、藤原順子の後山科陵と藤原沢子の中尾陵を異なった分類とした点である。和田氏の(1)と(2)は、従来、『弘仁式』段階までに一定の方針でまとめられ、編纂されたとされてきた。¹⁰⁾ それに対して、北氏は、藤原順子の後山科陵までが、『貞観式』の編纂段階で、まとめられ、それ以降が順次追加されたとされた。『弘仁式』ではなく、『貞観式』の成立を分類上で重視したのは、「貞観段階で弘仁の歴名の配列手が増えられた可能性はない」という認識に基づいている。

藤原順子が、貞観十三年九月に崩御し、『貞観式』の成立と同年であること、兆域記載が欠如していることや「假陵戸」という唯一の記載を有しているという点で「不統一な用語が使われている」ことを根拠として、『貞観式』

が完成した後に、末尾に追加されたとされた。そしてC群を、『貞観式』から、『延喜式』編纂時もしくは、それ以前に追加されたとした。したがって、和田氏と北氏の分類の相違は、『延喜式』に先行する式のうち、『弘仁式』と『貞観式』どちらを重視するかという点によると考えることが出来るのである。

このように、これまでの研究は、延喜諸陵寮式の成立時期の検討を通じて、律令陵墓制の成立時期を明確にすることを中心に進められてきたと考えることが出来る。そのことに留まらず、陵墓の营造と時期を同じくする可能性の高い『日本書紀』や『古事記』と、延喜諸陵寮式の比較検討を通じて、その記載の共通性から、陵墓制の成立時期を明らかにする研究も試みられている。¹¹⁾

ここで確認しておくべきことは、北氏の指摘にもあるように、延喜諸陵寮式の成立が、「律令国家陵墓制」や「律令陵墓祭祀」の成立と密接に関わることである。¹²⁾ 延喜式諸陵寮式の成立は、『弘仁式』の段階に体裁が整い、『延喜式』編纂の段階にいたって、その間の陵墓が追加され成立したとする見解が一般的である。¹³⁾ それに対して、陵墓制の成立は、律令国家の成立と密接に関わり、七世紀から八世紀前後を想定されていることも、諸氏の見解が一致するところであろう。

律令陵墓制の特質について（石井）

陵墓制の研究が、その成立期の史料ではなく、二〇〇年ほど後の史料に依拠して進められてきたことは、史料制約上、認めざるを得ない。陵墓歴名が主たる記載であるとはいえず、断片的な史料が多い中で、延喜諸陵寮式が、陵墓制に関する最も豊富な史料群であるという見地から、考察が進められてきたことは否定できない。

ここで、改めて、延喜諸陵式の歴名記載部分の構造を、確認してみたいと思う。その構造をまとめると、次のようになると思われる。

- (イ) 陵墓名の記載
- (ロ) 埋葬者の記載
- (ハ) 陵墓の国郡名の記載
- (ニ) 兆域もしくは四至の記載
- (ホ) 守衛者に関する記載

以上の五点を、主たる記載として、あげることができる。これらのうち、これまでの陵墓制に関する多くの研究は、(イ)(ロ)を中心に進められてきた。これらの記載順が、崩御もしくは死亡時期とどのような関連にあるかが、主な分析視角であったと考えることができる。その上で、延喜諸陵寮式の成立時期を明確にし、律令陵墓祭祀の成立時期

を明らかにすることで、日本の律令国家段階における「陵墓」の持つ意味を明らかにすることに、主眼がおかれていたということができると考える。

その一方で、(ホ)に関連する「陵戸」に関する研究も、多くあげることができる。それらの研究は、陵戸について、養老令では賤民として位置づけられていながら、大宝令では、賤身分ではなかった可能性が指摘され、その性格付けに関するさまざまな研究が行われている。陵墓の守衛に関わる人々が、どのような認識を持って、律令国家の体制に組み込まれていたかを検討するという視角で、多くの研究が蓄積されていると言って良いと思う。

しかし、そのような中にあっても、延喜諸陵寮式の「(ホ)守衛者に関する記載」に関する記載について、管見の限りであるが、詳細な分析を見ることができない。延喜諸陵寮式の陵墓歴名の守衛者に関する記載は、多彩であるといっても良いと考える。それは、守衛者とされる規定以外の記載を見ることができるとのである。その表記を分類してあげると、次のようになる。

- (a) 陵戸
- (b) 墓戸
- (c) 守戸

- (d) 假陵戸
- (e) 無陵戸
- (f) 無守戸
- (g) 無守戸—陵戸兼守

これらについて述べる前に、まずは、陵墓の守衛に関する規定を確認しておく必要があるだろう。延喜式諸陵寮式では、陵墓歴名の他に次のような規定を有している。

史料 A 『延喜諸陵寮式』

凡山陵者。置陵戸五烟令守之。有功臣墓者。置墓戸三烟。其非陵墓戸。差點令守者。先取近陵墓戸充之。

この記載に依れば、陵墓の守衛者は、「陵」が「陵戸」、「墓」が「墓戸」と定められている。さらに守衛者の不足に備えて、「陵墓戸」の「近」を取り充てることが、「非陵墓戸」を差す場合として規定されていることがわかる。上記の(a)から(g)のうち、(a)陵戸と(b)墓戸は、式の規定にみることで守衛者である。これまでの陵墓守衛者に関する研究は、管見の限りであるが、(c)守戸を「其非陵墓戸。差點令守者。先取近陵墓戸充之。」による守衛であるとしてきた。(e)無陵戸については、こ

のような理解で解することが可能であろう。

このような解釈が成り立つ一方で、(d)假陵戸や(f)無守戸、(g)無守戸—陵戸兼守の表記は、理解が困難となる。陵戸の不足にあたつて臨時に徴発された守衛者が、「守戸」であるならば、(d)假陵戸は、まさに「守戸」であると言わざるを得ない。それにも関わらず、陵墓歴名には、明らかに「假陵戸」と記載されているのである。

また、(f)と(g)にみえる「無守戸」も、同様に、成り立つ可能性がなくなる。臨時の徴発による守衛者が無い、と言うことが成り立ち得るとは、考えられない。陵戸・墓戸不足に際して、臨時徴発に依る守衛者の「守戸」すら設置されない、という意味であろうか。しかし、この場合も、本来は、「無陵戸」もしくは「無墓戸」と、するべきであろう。「無守戸」という記載が成り立つためには、臨時徴発であつたとしても、「守戸」に何らかの意味が付加されていると考えなければならないであろう。¹³⁾

このことについて、厳格な編纂段階を経していない『延喜式』では、「守戸」に関するさまざまな記載の可能性が指摘されている¹⁴⁾。それに対して、瀧川政次郎氏は、検討の余地を残すとしながら、自らの見解を示すには至っていない¹⁵⁾。北康宏氏の検討においても、「假陵戸」については、「諸陵式唯一の独自の記載」するのみで、その意義については

律令陵墓制の特質について（石井）

論究されていない。¹⁷ 利光三津夫・長谷山彰両氏は、陵戸に関する令規定について、詳細な検討がなされている。¹⁸ しかし、両氏の研究においても、「假陵戸」やそのほかの守衛者の記載の意義については、詳細に検討されていない。

このことを明らかにするためには、陵墓の守衛者がどのような性格を有するものであるかを明確にする必要があると考える。陵墓の守衛者の成立過程が、何らかの意味で陵墓制の成立に影響を与えている可能性も推測されるのである。

二．陵墓守衛者の成立について

陵墓の守衛者に関する最初の規定とされる条文をあげると次のようになる。

史料B 『日本書紀』持統五年十月乙巳条

詔曰。凡先皇陵戸者。置五戸以上。自餘王等。有功者置三戸。若陵戸不足。以百姓充。免其徭役。三年一替。

史料Bは、持統三年¹⁹に完成されたとする飛鳥浄御原令との関係で、「陵戸」に関する規定であるとされている。そして、この記事が、「令制の陵戸守衛制の起源を示す史料

である」ことは、これまで指摘される通りであろう。そして、史料Bが、養老令の規定として現れたものが、次にあげる史料C養老喪葬令先皇陵条であるとされている。

史料C 養老喪葬令先皇陵条

凡先皇陵。置陵戸令守。非陵戸令守者。十年一替。兆城内。不得葬埋及耕牧樵採。

史料Cの大宝令文が、どのようなものであったかは、議論が分かれるところである。それは、「陵戸」の表記が、大宝令では存在しなかった可能性が想定されるためである。そのような中にあっても、史料Cのもとになる大宝令文が存在したことは、諸氏の一致するところである。

史料Cのうち、「陵」の記載に、直接、関わる部分について、大宝令でどのような記載であったかを明らかにするため、「先皇」に関する『令集解』法家諸説を法家別に区分してあげると、次のようになる。

謂。先代以來帝王山陵皆是也。帝王墳墓。如山如陵。故謂之山陵。其皇后皇太子墓。在令無文。須依別式也。

釋云。先皇陵。先代以來帝王也。帝皇葬因陵如陵。故云

陵也。見名例。

古記云。陵。謂墓一種。以貴賤爲別名耳。帝皇葬因陵如陵。故云陵。問。三后及太子斂之處。若爲稱。又令守以不答。除即位天皇以外。皆悉稱墓。又令守名爲墓守。見官員令別記也。

跡云。令守。三后皇太子墓之人不見文。故有別式。(朱云。額同。)

朱云。先皇陵者。无先皇除限。皆常可置耳。額同。太上天皇陵皆同。但所充之陵戸數。可有別式。額同。

ここには、義解、釈説、古記説、跡説、朱説の五つをみることが出来る。これらのうち、古記説では、「陵」を「墓一種」としながらも、「帝皇葬因陵如陵。故云陵。」として、その用法を註している。また、「除即位天皇以外。皆悉稱墓」としていることから、「陵」の文言が、天皇に限定されたことが明らかになる。大宝令文においては、他とは区別された「陵」の用法、すなわち「陵」と「墓」の区別の成立をみることができると考える。また、「陵戸」の文言の成立に問題は残されるものの、次にあげる史料Dに

よつて、このことは、一層、明確になると考える。

史料D 『令集解』職員令諸陵司条古記所引官員令別記別記云。常陵守及墓守。并八十四戸。倭国三十七戸。川内国三十七戸。津国五戸。山代国五戸。免調徭也。公計帳文莫納。別爲計帳也。借陵守及墓守。并百五十戸。京二十五戸。倭国五十八戸。川内国五十七戸。山代国三戸。伊勢国三戸。紀伊国三戸。右件戸納公計帳文。而記借陵守也。

史料Dは『令集解』職員令諸陵司条の古記説が引用する官員令別記である。官員令別記については、未だ統一見解をみるに至っていない。持統期の飛鳥浄御原令制定時とみる説^①や、浄御原令の別記の影響を受けつつ、大宝官員令の別記として編纂されたという説^②など、大宝令の成立にともなつて、別記が成立したとされている。成立時期を最も遅らせるものとして、その上限を和銅六年まで遡らせる説^③などがある。

また、史料Dについては、その全体の国郡名記載法から、「京二十五戸」の記載が、藤原京、新益京であるする見解が、和田荜氏によつて出されている。そのことから、今尾文昭氏は、史料Dの成立を、新井喜久夫氏の見解に依拠し、浄

律令陵墓制の特質について（石井）

御原令の影響を受けながらも、大宝令と同時期に成立した別記²³であるとする見解を示されている。

しかし、史料Dの「京」が藤原京であったとしても、官員令別記の成立が、淨御原令制定時の可能性は、完全に否定することはできない。平城京への遷都は、和銅三年であり、大宝令が施行された大宝元年に、京は藤原京であった。史料Dの別記の成立年代が和銅六年を上限とする説は否定できたとしても、官員令別記の成立年代だけから、史料Dの成立時期を明確にすることは困難であろう。

そこで重要性を持つのは、官員令別記に関する大山誠一氏の指摘である。大山氏は、官員令別記を淨御原令に關係するという見解に対して、その影響は否定しないものの、大宝令の注釈書の古記説が引用することを重視される。大宝令の注釈書である古記説が、淨御原令制定時の条文を、大宝令の註に引用することは不自然であると指摘された。その上で、古記説所引の官員令別記が、淨御原令と密接な關係を持ちながらも、大宝令との關係で理解すべきであるという見解は、従うべきであると考える。

また、ここで考えあわせなければならないのは、古記説の性格である。細部にあたって見解の相違は見られるが、古記説は、成立が天平十年前後である、という点では一致をみていると考える。さらに、押部佳周氏によれば、古記

説は、現実に即した解釈よりも、理念としての法解釈をしていると指摘されている。²⁴このことを参考にすれば、古記説が注した大宝令が、実態はどうあれ、理念として、律令国家は令規定の上では、「陵」と「墓」は区別されるべきであったことを示していたと考えることができる。したがって、少なくとも、古記説が引用していること大宝令段階では、「陵」と「墓」を区別すべきであるという原則が、律令国家によって規定されたことが明確になると考える。ここで注意しなければならないのは、史料Bの記載である。史料Bは、次の二つの部分で構成されていると考えることができる。

（イ）原則規定…凡先皇陵戸者。置五戸以上。自餘王等。

有功者置三戸。

（ロ）例外規定…若陵戸不足。以百姓充。免其徭役。三年一替。

このように、（イ）原則規定と、その「陵戸」が不足した場合の（ロ）例外規定、を有していると考ええる。（イ）では、「凡先皇陵戸者。置五戸以上」として、歴代天皇の「陵」に、「陵戸」が「五戸以上」おかれることが規定されている。「陵戸」の表記については、後世の文飾の可能性も指摘されているが、その点を考慮に入れても、歴代天皇の「陵」に、

守衛者が「五戸以上」置かれた、と解することはできると思う。「自餘王等。有功者」については、「三戸」を置くという記載である。

それに対して、(ロ)の記載をみると、「陵戸」が不足した場合には、「百姓」をそれに「充」て、「徭役」を「免」じて「三年」に「二替」の処置を施すとある。ここで、注目すべきは、「若陵戸不足」とすることであると考える。

(イ)には、「先皇陵戸」と「自餘王等。有功者」に対し、その守衛者をおくことが定められている。しかし、(ロ)では、「陵戸不足」という表記しかみることが出来ない。したがって、「自餘王等。有功者」におかれた「三戸」も、「陵戸」と称せられたと考えることが出来るのである。

ここで、再度、(イ)の部分を確認しておきたい。史料Cの構成上の区切りを適応すれば、あるいは「先皇陵戸」は、「先皇陵」の「戸」と読むべきかもしれない。その場合には、(イ)には、「陵戸」の表記が存在しないことになる。史料Bをこのように解することができるならば、(イ)は、「先皇陵」と「自餘王等。有功者」の守衛を行う「戸」の数の原則を規定していると言うことが、より一層、明確になると思う。つまり、(イ)では、守衛者の呼称をあげることなく、その数量のみを規定していると考えることが出来るのである。

「若陵戸不足」が、「先皇陵戸」のみにかかる記載である、と解することもできる。「先皇陵戸」に「不足」した場合には、「以百姓充」が適応され、「自餘王等。有功者置三戸」の「不足」の場合には、充当されないと解することができれば、「若陵戸不足」は「先皇陵戸」のみにかかるという解釈も成り立つ可能性を否定することはできない。

ここで、考え合わせなければならないことは、史料Dの「借陵守及墓守」の記載である。「借陵守及墓守」は、「借陵守」「借墓守」について、「墓守」の「借」は、重複を避けるために、省略された表記法であるするべきだろう。つまり、史料Dの成立段階では、「陵守」だけでなく「墓守」に対しても、例外としての徴発が行われていたことになるのである。

史料Dの成立が、大宝令成立・施行と密接な関わりのあることは、ここで述べた。それと同時に、官員令別記と淨御原令は密接な関わりのあることは否定できない。したがって、史料Bの段階でも、「先皇陵戸」に関する不足が想定されるならば、「自餘王等。有功者」に対しても、守衛者の不足が想定されていたと考えることの方が自然であると考ええる。

史料Bの(ロ)は、「先皇陵」と「自餘王等。有功」の両方に関する不足への対応と、考えることができる。しか

律令陵墓制の特質について（石井）

し、(ロ)では「陵戸」の表記しか確認することができない。さらに、「先皇陵戸」が、「先皇陵」の「戸」と読むことができるならば、(イ)では、守衛者の「戸」に関するその数量を規定し、不足の場合の規定が「陵戸」という表記で、(ロ)が規定されていたと考えるべきなのである。

このように考えることが許されるのであれば、史料Bの段階では、「陵」と「墓」の区別が明確に規定されていなかった、と考えることができるのではないだろうか。史料Cは、「先皇陵」に関する規定のみである。それに対して、史料Bは、「先皇陵」と「自餘王等。有功」の双方に関する規定である。史料A『延喜式』段階では、「陵」と「墓」の守衛者に対して、明確に、「陵戸」「墓戸」という規定を有している。このことは、大宝令から始まる「陵」「墓」の区別が貫徹されているとすべきであろう。「陵」と「墓」の区分が明確になされているならば、その守衛者の表記は、明確になると考えるべきである。それに対して、その区分が明確でなければ、守衛者の表記にも影響を与えることになるであろう。

したがって、史料Bすなわち、持統五年段階では、「陵」と「墓」の区分は明確にされていなかったと考える方が、より一層、条文に則した解釈であると考ええる。史料Bの規定が、淨御原令の規定と密接に関わる規定であることは、

諸氏の指摘するところである。もし仮に、そうであったとするならば、淨御原令段階では、もしくはそれ以前の段階では、「陵」と「墓」の区分が明確にされていなかったという結論を導かざるを得ない。

このことは、『日本書紀』に見える「陵」の記述を考えることで、一層、明確になる。延喜諸陵寮式では、「墓」として記載される日本武尊や飯豊皇女、厩戸皇子も、『日本書紀』では、その葬所はすべて「陵」と記載されている²³。このことを考慮に入れば、『日本書紀』段階では、史料Bが言うところの「先皇」と「自餘王等。有功」の葬所に関する「陵」と「墓」の区別が、明確でなかった考えるべきであろう。

ここまでみてきたように、律令陵墓制は、淨御原令と大宝令では、「陵」と「墓」の区分の有無という点で、大きな転換があったと考えるべきである。このことは、区分が存在したか否かの問題に留まるものではない。いわゆる皇親や有功諸氏であろうと、「陵」を用いることができなくなったことは、天皇と他の区分が、明確になされたと考えることができるのである。

大宝令で、始めて天皇陵の守衛者である「陵戸」が、生み出されたことは、大宝令以前に、のちに「陵戸」と称される人が存在していなかったことを意味することではな

い。大宝令以前の段階では、陵墓全体の守衛者として、「陵戸」が存在していた可能性が新たに生まれたに過ぎない。その中から、純然たる「天皇陵」を守衛する人々を「陵戸」とし、同時に「墓戸」が生まれたことになると思われる。

このように考えれば、「陵戸」と「墓戸」は、同様の性格を有していたと考えるべきであろう。元々は、同一であったものが、大宝令での「陵」「墓」の区分によって、その差が生まれたと考える方が、より自然な解釈であると考ええる。このことは、「墓戸」に関する令本文の規定が、全く存在しないことによって傍証することができると考える。養老令では、「陵戸」については、さまざまな規定が指摘されている。それに対して、「墓戸」は、令本文に全く規定をみることができない。令規定の基層部分では、元々、「陵戸」から分離したという認識に基づいていたと考えるべきであると思う。

史料Bは、これまで、陵墓制に関する最初の規定であると言う重要な位置づけがされてきた。それにも関わらず、管見の限りではあるが、「先皇」と「自餘王等。有功者」の双方に「陵戸」が充てられた可能性を指摘したものは、これまでなかった。しかし、ここまでの考察を通じて、少なくとも、史料Bの段階では、「陵」と「墓」の明確な気分が成立していなかった可能性が強いと考える。

三. 唐制の陵戸について

淨御原令と大宝令で、「陵戸」の内実に大きな変化のあったことを指摘した。しかし、これまで指摘されるように、大宝令と養老令では、「陵戸」が、身分制的に大きな変化を受けた可能性が高く、「陵戸」に関する制度は、大宝令で完成されたものではなかったと考えるべきである。

周知の如く、大宝令はそのほとんどを散逸し、『令集解』所引の古記説の復元から、断片的にしかその条文を知ることとはできない。多少の字句の修正や、少数の条文の削除や挿入を除き、大宝令と養老令は、大半は同文であったという理解が一般的であろう。^⑩しかし、陵戸については、身分的に大きな変革があった可能性が高く、大宝令と養老令の双方を念頭においた考察が求められるであろう。

陵戸に関する大宝令と養老令の違いは、律令国家が根本原理として規定した良賤の身分制に大きく影響する。律令国家の特質が、「国家的土地所有と良賤制的身分秩序にあり、両者とも編戸制と不可分の関係にある」という観点から賤民制の分析をされた八木充氏は、後に「五色の賤」とされる「五種の賤民階層」の成立時期を、飛鳥淨御原令の成立から始まるとされた。^⑪

この八木氏の説に対して、関晃氏は、陵戸が賤民とされ

律令陵墓制の特質について（石井）

たのは、養老令からであつたとされた^②。このような視点に基づいて、律令国家の良民制支配という観点からの村岡薫氏の研究や新野直吉氏^③、賤民制成立過程の分析という視点に基づく神野清一氏の研究などをあげることができる。また、升井正元氏や利光三津夫・長谷山彰^④によつて、養老令段階から陵戸が賤身分になったことは、もはや通説的な位置づけを持つに至つていゝと思ふ。

関氏の指摘以前にも、陵戸の身分に関しては、雑戸との差異についてどのような意義を持つかが、さまざまに論じられてゐる。また、陵戸が賤民として他の賤民とどのような相違があるかについての考察が行われている。特に、官戸との関係においては、養老令での記述順が条文によつて上下することから、身分的な上下関係に関する考察が行われている^⑤。

瀧川政次郎氏は、日本の陵戸制が、『大唐六典』大常時献陵昭陵乾陵定陵橋陵恭陵署令常にある次の条文から、陵戸制が唐の制度を模したものであることが明らかであるとされた^⑥。

陵戸（乾陵橋陵昭陵各四百人）

（献陵定陵恭陵各三百人）

陵戸掌先帝山陵率戸守衛之事。（後略）

またさらに、次にあげる『大唐六典』戸部郎中員外郎条から、陵戸を良民であるとされた。

凡京畿充奉陵県及諸陵墓及廟邑戸。各有差降焉。橋陵尽以奉先。献陵以三元。昭陵以豊衆。乾陵以奉天。定陵以富平。各三千人。若献祖懿祖二陵。各置灑掃三十人。興寧永康二陵各置一百人。恭陵亦如之。隱太子及草懷懿德節愍惠莊惠文惠宣等七陵。各置三十人。諸親王墓各置十人。諸公主墓各置五人。周文帝隋文帝陵各置二十人。周隋諸帝陵各置十人。（皆取側近下戸充。仍分作四番上下。）

この中で、最後に記載された分註に、「皆取側近下戸充」とみえることを根拠として、唐における陵戸は良民であつたと結論づけられた。唐制に陵墓を守衛する「陵戸」は存するとされながらも、唐制における陵戸が賤民であるか、良民であるかが不明確なのは、養老令当色為婚条の対応唐令に、「陵戸」の表記がみえないことが理由であるとされる。そのため、瀧川氏は、上記の史料に基づいて、唐制陵戸を良民であつたとする結論を導かれてゐる。

これに対して、濱口重國氏は、次の条文によつて、唐の陵戸が賤民であつたとの見解を示された^⑦。

『唐大詔令集』卷七七典礼親謁条

(前略) 陵戸並放從良。終身灑掃陵寢 (後略)

この条文は、玄宗が開元十七年十一月の五帝陵親謁に際して出された敕文として、『唐大詔令集』卷七七典礼親謁条に収められたものである。したがって、「陵戸並放從良」の対象となるのは、「五帝」の陵戸となるが、明らかに「放從良」とされていることから、それ以前は、「賤」として認識されていたことを指摘された。さらに、当初は賤民であつたものが、解放されて、陵戸は良民となり、陵墓の守衛は、そのまま続けられる歴史過程を経たとされた。

ここで考え合わせなければならぬことは、『大唐六典』の性格である。『大唐六典』は玄宗に因つて、開元十年に編纂が開始され、開元二十六年に完成したとされている。開元二十六年の完成時には、既に開元二十五年律令格式が完成していたが、これらは参照されず、開元七年の律令格式を基準にしているとされている。^④

このことをもとにすれば、瀧川氏の根拠とされた『大唐六典』の内容は、開元七年の規定に基づいていることになる。^⑤ それに対して、濱口氏の根拠とした史料は、開元十七年のものとなる。それぞれの条文の内容に錯簡があつたと考えることは難しいであろう。その双方が正しいとするな

らば、開元年間には、少なくとも、良民の陵戸と、賤民の陵戸の双方が併存したと考えなければならない。

そこで、参考としなければならないのは、利光三津夫・長谷山彰氏の論である。^⑥ 利光・長谷川氏は、瀧川氏や濱口氏の指摘を参考としつつ、田仁の『入唐求法巡礼行記』に基づいて、唐における陵戸の良賤の在り方についての考察をされた。同書会昌四年九月条に、

仇軍容兒常侍知内省事喫酒醉顛触悞龍顏對奏云天子雖則尊貴是我阿耶冊立之也。天子怒當時打殺。勅令捉其妻子等流外。削髮令守陵墓。仍仰中官收納家中錢物。(後略)

とあることから、酒によつて天子に暴言を吐いた者が、その場で「打殺」された上で、その妻子は「流外」とされ、「削髮」し「令守陵墓」ことが記されているとされた。この場合「陵戸」という「階級」にされたのではなく、身分を降ろされて官賤とされ、「守陵墓」を担うことにされたと指摘された。「陵戸」が官賤中の独立した一階級名ではなく、官賤たる者に職役によつて与えられた名称であつた」と指摘されている。

すなわち、賤身分としての「陵戸」が固定的に存在したのではなく、「官賤」に降ろされたものが、その職務とし

律令陵墓制の特質について（石井）

て「令守陵墓」とされたことを指摘されている。その上で、「唐制においては陵墓守衛に専当する独立した賤民身分としての陵戸は存在せず、『大唐六典』に戸部郎中員外の条にみえる如く、付近の良民を差発して充てる場合もあれば、官賤の中から選んで「陵戸」とする場合もある」という結論を導かれた。唐制において、良民があてられる場合もあれば、官賤が職務として陵墓を守衛した場合も、同じく「陵戸」とされていたと考えることができるのである。

このことは、唐制における陵戸が、賤身分として、一つの階級として存していなかったことを意味している。濱口氏が、陵戸が賤民であることの根拠とされた『唐大詔令集』卷七七典礼親謁条においても、一階級として身分制が存しなければならぬことを意味しない。なぜならば、官賤として陵戸という職務を担っていた人々について、放逐されたと理解することも可能だからである。問題となるのは、陵戸に誰を充てるかであつて、陵戸が賤であるかということとは問題にされていないと考えるべきである。すなわち、唐制においては、陵戸は身分制として固定された者ではなく、職務の呼称的に存在したものと考えるべきなのではないだろうか。

もし仮に、これまで諸氏が指摘されるように、日本の律令国家においては、少なくとも、養老令で陵戸が賤として

の一身分階層を構成していたとするならば、日本の陵戸は、日本の律令国家が独自に創設した身分制と考えることができる。また、大宝令において、陵戸が一身分階級として固定されたと考えることができるならば、それだけでも、日本独自の規定と言うこともできると考える。

ここにあげた唐の事例と、性質を同様にする可能性を持った陵墓守衛に関する記載を、『日本書紀』にみる事ができる。

『日本書紀』顯宗元年五月条

狭々城山君韓俗宿禰。事進謀殺皇子押磐。臨誅叩頭言詞極哀。天皇不忍加戮。充陵戸兼守山。削除籍帳。隸山部連。

この史料は、顯宗天皇の父である市辺押磐皇子の謀殺に関わつたとされる狭々城山君韓俗宿禰が、「充陵戸兼守山」とされ、「削除籍帳」とし、「隸山部連」されたことが記されている。この顯宗紀の「陵戸」に関する記載は、犯罪に関わり連座させられ、身分を降ろされて、「陵戸」とされた可能性のあつたことを想起させる。

この「籍帳」は、律令制下の戸籍・計帳を前提とした認識に基づいて成立するものであり、顯宗紀のものと捉えることはできない。また、「陵戸」の表記も、これらの前提

となる編戸制に基づいた律令制下の「陵戸制」と全く同一のものと考えすることはできない。したがって、『日本書紀』編纂にあたって文飾された可能性を多く含んでいることに、注意を要する。

「充陵戸兼守山」や「削除籍帳。隸山部連」を、身分を降ろされて、賤民となったと理解することも困難であろう。これまでの諸氏の研究に依れば、陵戸の賤身分の成立は、養老令の施行を待たなければならぬ。『日本書紀』編纂時は、大宝令段階であり、養老令の規定に則した理解はできない。ここでは、「充陵戸兼守山」は、罪によって令の守衛に専当することを命じられたと考えるべきである。また、「削除籍帳。隸山部連」についても、狭々城山君韓俗宿禰が賤としての身分に降ろされたとするよりも、本姓を剥奪され、「山部連」に隸せられたとする方が穩当であると考えられる。

さらに、仁徳紀には、次のような記述もみることもできる。

『日本書紀』仁徳六十年十月条

差白鳥陵守等充役丁。時天皇親臨于役所。爰陵守目杵。忽化白鹿以走。於是。天皇詔之曰。是陵自本空。故欲除其陵守。而甫差役丁。今視是怪者。其懼之。無動陵守者。

則且。授土師連等。

この史料は、日本武尊の白鳥陵の「守」を「役丁」に充てようとしたところ、「陵守目杵」が「白鹿」となって走り去ったということが起こり、仁徳天皇が、陵の守衛に専念させ、「土師連」らの管理下に置いたことが記されている。陵の守衛者が、要請によつては、他の役につくことが記されている。そのことが問題となり、これ以降は、専当することになったことが記されていると理解することができる。

この二つの条文に共通する認識は、「山部連」「土師連」という特定氏族の下で、陵の守衛者に、永続的な守衛を行わせしめたことである。身分的に「隸山部連」と「授土師連」が、どのようなものであるかを軽々に論じることができない。両氏の私的な奴婢として陵の守衛を行つたならば、養老令の賤民的な陵戸制成立に向けた理念的な萌芽を読み取ることができる。しかし、この記載からは、「山部連」と「土師連」の両氏が、本来、職務としていたことに対して、部民的にしたがって従事することを規定したようにも理解することが可能である。それらが、国家的な特定の身分階層としてではなく、氏族に何らかの形で属する人々に担われていたことに、注意を要するであろう。

律令陵墓制の特質について（石井）

もし、令制以前に、陵の守衛という発想があったとするならば、その管掌する氏族の下で、部民制的な守衛が行われていたことを想起させるのである。『日本書紀』段階、もしくはその編纂段階において、陵墓の守衛が固定された人々によって行われるべきであることが認識されていたことは明らかにすると考える。

これら二つの事例が、令制段階の陵戸の身分的な位置づけを踏まえて、文飾された可能性は十分に想定できる。したがって、律令国家段階では、どのような認識をもつて、陵戸もしくは陵墓の守衛者が位置づけられていたかを明確にする必要があると考える。

四・大宝令と養老令の陵戸について

養老令から、陵戸が賤身分とされたとする根拠とも言える史料として、養老戸令当色為婚条を考えてみたい。

史料E 養老戸令当色為婚条

凡陵戸。官戸。家人。公私奴婢。皆当色為婚。

この史料Eとの関連で、重要な意味をもつのが次にあげる平城宮木簡である。

史料F 第四十四次平城宮発掘調査出土木簡⁴⁶

「家官戸家人公私奴婢皆当」

「凡官奴婢年六十六以上乃」

史料Fは、長さ十六・八センチ、幅一・九センチの短冊形と推測でき、薄い素材の表と裏に、ここにあげた記載を有しているとされる。この木簡は、坊間大路西側溝（SD五七八一）出土と伝えられ、同じ溝からは、天平九年、天平十年、天平十九年の年紀を持つ木簡の出土も伝えられている。素材や記載内容から、公式の用途に用いられたと言うよりも、習書に用いられた木簡であることが指摘されている。

同じく出土した木簡の年紀が天平とあることから、この木簡の習書がもととしたのは、大宝令と考えるべきとされている。表面は、ここにあげた史料Eの大宝戸令当色為婚条、裏面は、大宝戸令官奴婢条であるとされる。

これまでも、多く指摘されることであるが、史料Fと史料Eを比較すると、史料Fの表面の第一字目の「家」が、史料Eの「凡陵戸」に相当する。史料Fの「家」を「凡」の誤りであるとすれば、大宝戸令当色為婚条が、「陵戸」の文言を欠くこととなる。このことに基づいて、大宝令文の戸令当色為婚条を復元すると、次のようになる。

凡官戸。家人。公私奴婢。皆当色為婚。

したがって、大宝令では、「陵戸」が、当色、すなわち賤民として婚姻の制限を受けていなかった可能性が指摘できるのである。大宝令復元にあたって参照すべき史料E古記は、次のような記載になっている。

古記云。問。官戸家人相交接得不得。答。不得。若所生男女者。知情者從重。不知情者從輕。其官戸至七十六以上。放為良故。但官戸家人。與公私奴婢為夫婦所生者。知情者從賤。不知情者亦從輕。其公私奴婢相為婚者得也。

問答形式として、「官戸家人」に関する註を有するに留まっている。このことは、戸令当色為婚条に、「陵戸」の記載がなかったことを想起させるものであり、史料Fの出土に因って、そのことが明確になったと考えるべきであろう。また、おそらく古記説が所引するであろうと考えられる「一云」は、次にあげる二つをみることができる。

史料G

一云。官戸家人。相為婚亦得也。所生者從母耳。問。雜

戸陵戸。如何為婚。答。雜戸與良人婚姻聽。但陵戸不聽。若與良人為夫婦所生男女者。不限知情不知情。皆從陵戸。為不在奴婢故。但與家人奴婢。為夫婦所生者。與良人同耳。

史料H

一云。良人所生男女者。皆從父為姓。陵戸所生男女者。從父從母。皆與奴婢同。即知。陵戸與良人為夫婦、所生男女者。知情者從重。不知情者。從輕。凡諸條。不在當色為婚。所生男女者。知情從重。不知情從輕耳。

古記所引と考えられる「一云」は、古記と同時期に成立したとされている。史料Gでは、「雜戸陵戸」が併記され、良人との通婚について、問答形式で註されている。その内容は、雜戸については、良人との通婚が許されているが、陵戸については許されていない。もし仮に、陵戸が賤身分でないとするならば、良人との通婚が可能であったとされるべきであろう。

したがって、陵戸が、大宝令から、賤身分であったと考えることもできると思う。さらに史料Gでは、良人と陵戸が「夫婦所生男女」について註されている。その場合には、「不限知情不知情」に限らず、陵戸とすることが記されている。その理由を、古記説は「為不在奴婢故」としている。

律令陵墓制の特質について（石井）

このことから、陵戸が、「奴婢」とは異なつたことを示していることができるのである。この点について、利光・長谷川氏は、「陵戸が奴婢に代表される賤民法の適用外であつたためであるとされた。したがって、婚姻形態において陵戸は、官戸以下の賤民としての身分とは異なる特殊性を持つと考えざるを得ない。」

このことは、史料Hからも伺い知ることができる。陵戸と良人の所生男女について、「知情者従重。不知情者」という点では、養老戸令為夫婦条の法意と同意であると解することができると思われる。

養老戸令為夫婦条は、次のような内容である。

史料I 養老戸令為夫婦条

凡官戸。陵戸。家人。公私奴婢。与良人為夫妻。所生男女。不知情者。従良。皆離之。其逃亡所生男女。皆従賤。

この規定では、陵戸と良人との間に生まれた子は、「不知情者。従良。」とあることから、「不知情」であれば、良人につけられることとなる。史料Hでは、陵戸と良人の間に子が生まれた場合、「知情者従重。不知情者。従軽」として、「知情」であれば「重」、すなわち「陵戸」に、「不知情」であれば「軽」の良人にするとしている。この内容

は、史料Gに異を唱え、史料Hと同じ内容を主張している考えることができるであらう。しかし、史料Hが、そのよりどころとされるのは、史料Iではなく、その後半分に見える「凡諸條。不在當色為婚。所生男女者。知情従重。不知情従軽耳。」であるとされている。この点からも、升井氏は、当色為婚条には、陵戸の文言はなかつた可能性が高いことを指摘されている。

このことに付け加えるとすれば、史料Iの古記説からは、陵戸の文言を復元することはできない。したがって、養老戸令当色為婚条と為夫婦条には、大宝令では、陵戸の文言がなかつたと考えることが穩当であらう。

さらに注意を要するのは、史料Eの『令集解』に記載された釈説の内容である。

史料J 『令集解』戸令当色為婚条所引釈説

釈云。當色為婚。官戸家人相通嫁娶。是謂當色。公私奴婢亦同也。一云。雜戸與良人為婚聽。但陵戸不聽。若與良人為夫婦。所生男女者。不限知情不知情。皆従陵戸。為不在奴婢故。但與家人奴婢。為夫婦所生者。與良人同。一云。良人所生男女者。従父為姓。陵戸所生男女者。従父母。皆與奴婢同。即知。陵戸與良人。為夫婦。所生男女者。知情者従重。不知情者従軽。凡諸條。非當色為婚。

所生男女者。知情従重。不知情従輕。此説為長。或云。陵戸與官戸婚。所生男女從官戸也。一云。從母也。

史料Jには、「一云」という異説を三つ所引している。このうち、注目したいのは、第一と第二の「一云」である。第一の「一云」の部分は、史料Gの間答形式のうち、「答」以下の部分に、一部の文章の区切りを除いて、共通している。史料Hが「陵戸所生男女者。從父從母」としているのに対して、第二の「一云」が「陵戸所生男女者。從父母」とする点を除いて、共通している。

釈説は、延暦年間に成立した養老令の注釈とされている。^④ 釈説は、多少の字句の変更を行つて、史料G・Hを引用していると考えるべきであろう。史料GとHの成立が、古記説と同じ天平期の大宝令制下であつたとするならば、史料Jの成立時にも、陵戸は、大宝令と変わらない性格を有していた可能性が指摘できる。

すなわち、陵戸は、賤の身分ではなかつた大宝令と同じ性格を、賤とされている養老令下でも持ち続けた可能性が指摘できるのである。このように考えることが許されるのであれば、養老令であつても、賤として明確な位置づけがなされていたと断ずるわけもいかなしいとはいえないと考える。

賤民制の研究という立場から、神野清一氏は、養老令段階にあって、陵戸は賤としての身分を持ちながらも、賤視されなかつたとされている。^⑤ あるいは、日本古代の賤民についてこのことは共通した認識である可能性も否定できない。^⑥ このような認識が成り立つのは、大宝令で賤身分として存在していなかつた陵戸の認識が、何らかの形で、養老令制下でも影響していたと考えざるを得ない。

このほか、養老令本文中に「陵戸」の表記がみられる条文として、戸令造戸籍条（本文註）と賦役令舍人史生条、喪葬令先皇陵条をあげることができる。これらのうち、賦役令舍人史生条では、大宝令文での陵戸の語の存否を判断することができないとされている。養老戸令造戸籍条では、次のように規定されている。

史料K 養老戸令造戸籍条

凡戸籍。六年一造。起十一月上旬。依式勘造。里別為卷。惣写三通。其縫皆注其国其郡其里其年籍。五月三十日内訖。二通申送太政官。一通留国。〔其雜戸陵戸籍。則更写一通。各送本司。〕所須紙筆等調度。皆出当戸。国司勘量所須多少。臨時斟酌。不得侵損百姓。其籍至官。並即先納後勘。若有増減隱没不同。随狀下推。国承錯失。即於省籍。具注事由。国亦注帳籍。

律令陵墓制の特質について（石井）

と規定され、その本文註に「陵戸」の文言をみる事ができる。この部分の古記説は、

史料Ⅰ 戸令集解造戸籍条所引古記説

古記云。其雑戸籍。則更寫一通。謂神戸籍亦更寫一通。各送本司也。

と記載されている。このうち、「其雑戸籍。則更寫一通。」と古記説が引用することから、大宝令本文の引用であるとみて大過ないであろう。したがって、大宝戸令造戸籍条では、「雑戸籍」のみで、「陵戸籍」が存在しなかった可能性が高い。大宝令段階では、陵戸は、良人と全く同じ戸籍に記載されていたことが明らかになると考える。それに対して、雑戸籍は、大宝令段階から存在したことになる。その雑戸籍の下に、陵戸籍が養老令で挿入され、新しい陵戸制が始まったことになる。そして、雑戸と陵戸は、戸籍という点では、同じく規定され、管理されて可能性が想起されるのである。

法家諸説が、雑戸と陵戸との比較に基づいて、多くを述べていることのみならず、このことから、これまで研究が、雑戸との比較に因って、陵戸を理解するという傾向が強くて出ることが理解できる。雑戸と陵戸の共通性と相

違について、瀧川政次郎氏による整理を参考にし、利光・長谷川両氏は、次のように整理されている。⁵³⁾

(1) 雑戸陵戸はとも良民と同額の口分田を給せられ、田租を徴せられる。

(2) 雑戸陵戸は、共に課役を免ぜられる。

(3) 雑戸陵戸は共に公民とは別に戸籍を作成する。

(4) 雑戸陵戸は共に解放の規定を持たない。

(1) については、陵戸の口分田班給に關して、養老令に規定を有しない。養老田令官奴婢条で、「公私の賤人についての規定」⁵⁴⁾とされながら、陵戸に關する規定は本文にみることは出来ない。同条集解の穴記に、「田租及寺家人等田。並放令釈也。家人奴婢可出租。陵戸亦可出租。問。官戸奴婢及家人奴婢等。有給園地乎。亦陵戸給田園等。如何。答。雜戸陵戸官戸奴婢等。不見給園地之事。但陵戸給口分田如良人耳。(後略)」とあり、朱説に「貞云。家人奴婢口分田之租。准良人出者。問。雜戸陵戸品部等何。給口分田不。答。雜戸以下皆可給也。何者。不可下於奴婢故。但租可出者。(未明)。(後略)」あるに過ぎない。したがって、陵戸がこの点でも、養老令本文の規定として、官戸以下の賤身分とは別に認識されていた可能性が指摘できる。

(2) は、養老賦役令舍人史生条に、「凡舍人。史生。伴部。使部。兵衛。衛士。仕丁。防人。帳内。資人。事力。

駅長。烽長。及内外初位長上。勲位八等以上。雑戸。陵戸。品部。徒人在役。並免課役。(後略)とあることが、根拠とされている。この場合には、陵戸は、官戸以下の賤身分と列記されているのではなく、舍人以下の良人と併記され、「免課役」とされている。また、令本文の記載順が、身分制における上下を表すとすれば、陵戸が品部よりも先に記されていることも注意を要するであろう。(3)については、ここで養老戸令造戸籍条について述べたことから、改めて述べるまでもないであろう。

養老戸令官奴婢条には、「凡官奴婢。年六十六以上。及廢疾。若被配沒。令為戸者。並為官戸。至七十六以上。並放為良。(任所樂處附貫。八十以上。亦聽從良)に」とあり、同放家人奴婢為良人及家人条には「凡放家人奴婢。為良及家人者。仍經本屬。申牒除附。」とあることから、陵戸を除く、官戸以下の賤には、解放の規定がある。このことから、(4)は明らかであろう。瀧川政次郎氏は、「陵戸が解放されることを予想した法文は、律令の何れの篇にもみえない。」とされ、養老戸令官戸自拔条に「凡官戸。家人。公私奴婢。被抄略。沒在外蕃。後得歸者。各還官主。」とあるにも関わらず、陵戸の記載がないことを、「陵戸の解放の事無かりしことを断定せしめるに十分である」とされている。

したがって、雑戸と陵戸の共通性は、陵戸と賤身分の相違点を考えることができるのである。また同様に、両者の相違点は次のようになる。

(1) 雑戸は公民と通婚しうるが、陵戸は公民と通婚できない。

(2) 雑戸は義倉の粟を出すが、陵戸は出さない。

(3) 雑戸は公事に参加するにあたって、皂纓頭巾。黄袍を着用しうるが、陵戸は橡の墨の衣を着用しなければならない。

この三項目の相違点は、あたかも、官戸以下の賤身分と、陵戸の共通性を表しているかのように扱われている。(1)はここでみた戸令当色為婚条から明らかであろう。しかし、史料Gと史料Hとしてあげたように、戸令集解当色為婚条の古記説所引の「一云」であることから、陵戸が賤身分でなかった大宝令から変わらない認識であることを考えると、官戸以下の賤民との共通性というよりも、陵戸独自の規定であると考えるべきである。

(2) については、養老賦役令本文に「凡一位以下。及百姓雑色人等。皆取戸粟。以為義倉。(後略)とみえ、その集解に、「謂。品部及雑戸等。其陵戸不在此限也。釈云。品部及雑戸也。師説云。陵戸不在此限例。古記云。問。雑色人等何色。答。雑戸等色。但陵戸不在此例。穴云。雑色。謂。

律令陵墓制の特質について（石井）

雑戸品部也。其陵戸不出義倉。又无被賑給也。」に起因している。この註が「雑色人」に付されたものであると考え、ることでき、(2)は賤身分の有無を前提したものではなく、雑戸との違いであることは明らかである。また、ここにも、古記説をみることで、大宝令から養老令まで、陵戸が賤身分でなかった時までも、雑戸と異なり、義倉を出さなかったことが明らかになる。

相違点の(3)は、官戸以下の賤身分と、陵戸の共通性を表していることになる。衣服令集解制服条には、「穴云。家人奴婢。為參公事時是。官戸陵戸一同。朱云。家人奴婢。謂官戸奴婢亦同也。先云。雑戸可同良人服色。但陵戸服色何。若同家人哉何。額云。同者。」とみえ、陵戸が他の賤身分と同じであることが明らかになる。しかし、「先云」に「雑戸可同良人服色。但陵戸服色何。若同家人哉何。」と在ることに注目すると、ここでも、雑戸との比較の上で、陵戸の「服色」が記載されており、雑戸と陵戸の共通を持つという認識が強かったことを伺い知ることができる。

したがって、陵戸は、良身分である雑戸と、多くの点で共通性を持ち、かつ陵戸独自の規定を持つが、官戸以下の賤身分との共通性は、公事に当たる際の服色に限られていたと考えることができるのである。榎本淳一氏によれば、服制による良賤の区分は、日本においては唐ほど厳格では

なく、あくまでも「公事」^⑤においてのみ、服色の規定が適応されたとされている。このことに依拠すれば、陵戸が官戸以下と同じ色を服するからといって、賤視を強調することはできないのである。

以上のように、陵戸は、養老令の施行によって賤身分になったとされながらも、それ以降も、賤民というよりは、良身分に属する雑戸との共通性が際だっている。そのような中にあっても、陵戸独自の規定も有することから、雑戸とも異なった性格として位置づけられていたことは、明らかにできたと考える。

そこで、注目すべきは、史料としてあげた戸令集解造戸籍条所引古記説である。大宝令の注釈書である古記説には、陵戸籍は見えないが、釈説と穴説には次のように記されている。

史料M 戸令集解造戸籍条所引釈説及び穴説

釈云。神戸籍亦同。神祇官職掌名籍故。穴云。神戸籍文略。案神祇官職掌可知。

このことについて、利光・長谷川氏は、神賤と陵戸の共通性を指摘される一方、神戸と陵戸の共通性を示唆的に提示されている^⑥。その上で、大宝令と養老令における陵戸に

関する規定の変更を、「身分的な性格の変化によるものではなく、陵墓守衛民の永代確保という制度的な必要に基づくものであった」とされている。つまり、陵戸の賤民化ということではなく、職務上の意義の変化が、令規定に反映された結論づけている。

この利光・長谷川氏の指摘は、ここまでの検討を通じて述べてきたことを合致するものであり、首藤すべき見解であると考ええる。また、神戸と陵戸との共通性を示唆的に示された点は、非常に重要な指摘であると考ええる。両氏の指摘を参考とすれば、神賤もしくは神戸と、どのような共通性や相違点を有しているかを検討することは、陵戸の在り方を明らかにする上で欠かすことのできないことであると考える。

日本古代の神戸については、「神社ニ隸スル封戸」という見解が、通説的な見解であったが、熊田亮介氏によつて、「神社祭祀を支える、従属性の強い祭祀專業集団」という性格付けが提示されている。熊田説に対して、大関邦夫氏は、国家的意義を重視した側面から、従来の通説的な見解を批判され、個別の神社に対する従属性をよりも、神戸と在地奉斎集団の違いに注目し、「在地にどのような奉斎集団が存在しても、それが神戸に設定されることはなかった」と指摘された。その上で、神戸の設置は、「国家的要請に

連なる験をとりわけ強く示すと国家に認定された神に対して与えられたもの」であるとされた。さらに、「その神が国家のために験を示すことを通じて、天皇・律令国家そのものに仕奉すべき位置づけられていた」とされた。また、小倉慈司氏は、神戸が封戸としての性格を持ちながらも、神戸籍が作成されるという特殊性のあることに着目され、一般の封戸との相違点に重点を置きながら、神戸と神祇官の關係について論じられた。その上で、「神戸が単なる神社への奉仕集団ではなく、国家の意図を承けて設置された」とされた。

このように、神戸に関する研究は、その封戸としての側面から、天皇や律令国家の祭祀への関わりが、特に重視されているといつて良いと考える。良人とは別の戸籍が作成れるという点や、天皇や律令国家的な祭祀に深く関わりを持つという点で、神戸と陵戸の類似性を指摘することができ。これまで、陵戸と雑戸との比較は多くみられるのに対して、陵戸と神戸との比較を詳細に行った研究を、管見の限りではあるが、みることができない。今後さらに、陵戸の実像を明らかにするためには、雑戸だけでなく、同じく独自の戸籍を作成され、その他にも陵戸との共通性が想起される神戸との比較検討が、不可欠であると考ええる。特に、養老令では、陵戸籍が作成されたことは令文に明確に

律令陵墓制の特質について（石井）

規定をみることで、当該期の意味を明かし、それ以前との相違を明らかにする上では、欠かすことの出来ない分析視角であると考ええる。

むすびにかえて

ここまで述べてきたことまとめると次のようになる。これまでの陵墓制に関する研究は、延喜諸陵寮式を中心に進められてきたが、その守衛者の表記との関連で考察を行ったものをあまり見ることができないことを指摘した。陵墓の守衛者のうち、令本文に規定されているのは、天皇の陵の守衛にあたる「陵戸」のみである。しかし、「墓」の守衛者の「墓戸」に規定が存在しないということではなく、陵戸の規定で代用されたと考えるべきであることを述べた。

持統五年に出された陵戸に関する最初の規定の時点では、「陵」と「墓」の区別は、明確なものではなかった。それが明確に成立するには、大宝令の施行を待たなければならなかった。日本の律令制が範とした中国の陵墓守衛者は、同じく「陵戸」と呼称され、良民の場合と、良民から墮とされた賤身分のものが担当する場合があり、明確に陵戸が賤民であったと認めることはできない。中国における

「陵戸」は、階層としての身分を表すよりも、職務としての呼称としての側面が強いことに起因している。

律令制以前の『日本書紀』には、中国の陵戸と同じように、良民から降ろされ、守衛にあたったと考えられる記載をみることができる。しかしそれは、良民が、陵戸として賤民に墮とされたことを意味するのではなく、特定氏族の監督下に、専断的な陵の管理を行うという認識の表れであるという指摘をおこなった。

このような認識は、令制段階の陵墓管理に関する認識の表れであると考えることができる。これまでの研究では、陵戸に関する令規定は、養老令で大きな改変を受け、陵戸は、「賤民」として位置づけられたとされてきた。それにも関わらず、賤視された可能性は薄いとされている。大宝令から養老令で、陵戸が受けた身分の改変は、律令国家によって、陵戸の身分を固定化するためであるという可能性を提示した。強固な世襲性を有し、他との婚姻までも禁じられた陵戸は、固定化した独自の身分体系をもつて、陵墓の守衛にあたることを任としたと考えることができるのである。

陵戸が、山陵奉幣祭祀の対象たる陵墓の守衛にあたることとされるにもかかわらず、具体的にどのような内容を担っていたかは未詳といわざるを得ない。そのような側面を重視

し、陵墓祭祀が国家祭祀として形作られて行く過程では、律令神祇祭祀の一端を担う神戸と、陵戸との共通性と相違点の抽出から、その特徴を、さらに明確にできる可能性を提示した。これまで、陵戸は、雑戸との関係で論じられることが多かった。しかし、それだけではなく、神戸や神賤との関係から考察する必要性について指摘した。

陵墓守衛にあたる制度の確立は、固定化された国家身分として陵戸制が成立する養老令の成立を待たなければ成らなかった。このことは、律令制導入にあたって、先皇陵祭祀が始めて意識されたことと、密接に関わることではないだろうか。令制以前と考えられる『日本書紀』の記述で、明らかな先皇陵祭祀を行った例は、決して、早い段階からみられるわけではない。

大海人皇子が、天武元年七月に壬申の乱の戦勝祈願のため、神武天皇陵に奉馬を行った記事が、その最初の記載である^⑤と考える。それ以前には、先皇陵を祀るという觀念が希薄だった可能性が指摘できる。墓を祀るという行為は、決して古いものではなく、新しい考えであることは、藤原京だけでなく、平城京の造営にあたつて、巨大古墳が破壊されたことが物語っていると考える^⑥。このような認識、墓に対する觀念が基層にあり、先皇陵祭祀という発想自体が、律令制の導入に伴つて、生まれたとすべきであると考ええる。

諸氏によつて指摘されるように、律令国家の天皇制として欠かすことの出来ないものとして、日常的な陵墓の守衛を含んだ祭祀が生まれたと考えるべきである。まさに陵墓制は、律令国家がその觀念を表すために不可欠の要素として、その形成過程で準備したものである、と考えることができる。しかし、陵墓の守衛者である陵戸については、規定の明確さを欠いている。雑戸や、官戸以下の賤身分とさまざまな共通性をもちながらも、その一方で、特殊なかつ、独自の戸籍である陵戸籍をしている。

養老令での改変で、陵戸の文言が、さまざまな規定に挿入されたことはここでみてきた通りである。しかし、そのことが、一概に、陵戸が賤民として認識されたとは言い難いという結論を導いた。もしくは、賤民としての位置づけ自体が、賤視を招くことがなかったならば、陵戸を取り巻く特殊な事情が、賤としての位置づけを生みだし、良人とは異なつた身分制を独自に創設させた可能性が想起されるのである。

律令国家の基礎となる身分制が良賤制であることは、否定することはできないであろう。そのような中にあつても、陵戸は、良と賤の双方に帰属する側面を有した存在といえるのである。良と賤の中間に位置する存在として、陵墓の守衛にあたつたと言つても過言ではないであろう。このこ

律令陵墓制の特質について（石井）

とから、良賤制の明確な区分が適応されない身分制の存在も明らかになるものであると考える。このことが、律令陵墓制の最も大きな特徴と位置づけることができるのではないだろうか。律令国家が原則とする良賤制の枠では理解しがたい陵戸が守衛する陵墓は、当然のことながら、令制の枠組みだけでは理解しがたい特質を持っていた可能性が高いと考える。

以上のように、陵戸の検討を通じて、律令陵墓制の特質について、可能な限り私見を示してみた。随所において問題提起的に述べるに留まり、推論に推論を重ねたことも否めない。そのような中で、陵戸の身分的な特殊性が、律令陵墓制の成立過程に密接な関わりにあることは、少なくとも、指摘できたのではないかと考える。また、律令陵墓制の考察は、その守衛者たる陵戸の考察なくしてはあり得ないことも、示すことができたのではないかと考える。

私は、これまで、令制以前の喪葬において、豪族の喪葬権を指定し、その検討を通じて、律令制は喪葬制にとつて、画期にならない可能性を示してきた。⁶⁶ その指摘は、一見、ここまで本稿で述べてきたことと矛盾するようにも思える。しかし、陵墓の主な守衛者である陵戸の身分的な確立は、養老令を待たなければならぬ。陵戸に関しては、大宝令制定もしくは、それ以前の律令国家形成段階では、画

期としての意味を持つまでには至らなかったと考えることができると思う。

また、大宝令によって、「陵」と「墓」の区別が明確化されたことは、表記上の問題であり、喪葬制の内実には、どのような影響を与えたかを明らかにしなければならないと考える。さらに、天皇や律令国家の祭祀としての陵墓制の問題は、喪葬制の喪と葬の段階における「葬」以降のものであると考えることができる。「葬」については、ここで述べたような変遷をたどることが、明らかになったと考える。「喪」の段階については、「葬」に関するこのような変化がどのような影響を与えたかを明確にすることは、喪葬制を理解する上で、重要なことであると考える。しかし、本稿では、これらについては、全く触れることができなかった。

この他にも、残された課題は多い。特に、陵戸と神戸の共通性や相違点については、早急に、解明しなければならぬと考える。また、養老令制定後に、陵戸がどのように変遷していくかを、さらに明確にする必要もあるだろう。さらに、延喜諸陵寮式の守衛者記載が、さまざまであることも、単に、指摘するに留まり、その意義について、全く論究することができなかった。これらのことは、残された多くの課題と共に、今後の課題として、ひとまずむすびにかえて、諸氏のご叱正を待ちたいと思う。

註

- (1) 山田邦和「平安時代天皇陵研究の展望」(『日本史研究』五二一―五二二号 日本史研究会 二〇〇六年一月)。
- (2) 編集委員会「特集にあたって」(『日本史研究』五二一―五二二号 日本史研究会 二〇〇六年一月)。このような視点で進められた主な「陵墓」に関する研究をあげると次のようになる。田中聡「『陵墓』にみる「天皇」の形成と変質―古代から中世へ―」(日本史研究会・京都民科歴史部会編『陵墓』からみた日本史、一九九五年一月)。藤堂かほる「天智陵の営造と律令国家の先帝意識―山科陵の位置と文武三年の修陵をめぐる―」(『日本歴史』六〇二、一九九八年七月)。北康宏「律令国家陵墓制度の基礎的研究―『延喜諸陵式』の分析からみた―」(『史林』七九―四 一九九六年七月)。同「律令陵墓祭祀の研究」(『史学雑誌』第一〇八編一一号、一九九九年一月)。同「律令法典・山陵と王権の正当化―古代日本の政体とモニュメント―」(『ヒストリア』一六八、二〇〇〇年一月)。同「天皇号の成立とその重層構造―アマキミ・天皇・スメラミコト―」(特集・律令天皇の成立と日本『日本史研究』四七四、二〇〇二年二月)。同「日本律令国家法意識の形成過程―君臣意識と習俗統制から―」(『日本史研究』四九四、二〇〇三年一月)。今尾文昭「考古学から見た律令期陵墓の実像」(『日本史研究』五二一―五二二号 日本史研究会 二〇〇六年一月)など。これらの中で、これらの中で、北氏の一連の研究は、大きな影響を与えていると考えることができる。
- (3) 後述するように、延喜諸陵式では、いわゆる「ミハカモリ」「ハカモリ」について、さまざまな表記を見ることが出来る。

史苑 (第六七巻 一号)

- 本稿では、これらを一括して呼称する時に、字義の持つ意味についてはひとまず保留して、煩雑になることを避けるために、「守衛者」と表することにする。
- (4) 延喜諸陵寮式の陵墓歴名については、本稿末に掲載した「陵墓表」参照。
 - (5) 和田軍一「『陵式』に関する二三の考察」『歴史地理』五二―一・三・四、一九二八年)。
 - (6) 虎尾俊哉「日本歴史叢書 延喜式」(吉川弘文館、一九六四年)。
 - (7) 時野谷滋「神武天皇紀と諸陵式」(中山久四郎編「神武天皇と日本の歴史」、一九六一年。後に『律令俸禄制度史の研究』に再録)。
 - (8) 日本武尊は『日本書紀』景行四十年是歳条、飯豊皇女は『日本書紀』顕宗即位前紀、厩戸皇子は『日本書紀』推古二十九年二月癸巳条に「陵」に葬ったことが記載されている。
 - (9) 北康宏「律令国家陵墓制度の基礎的研究―『延喜諸陵式』の分析からみた―」(『史林』七九―四 一九九六年七月)。
 - (10) 前掲註(6)。
 - (11) 白石太一郎「記・紀および延喜式にみられる陵墓の記載について」(『古代学』六二、一九六九年。のちに「古墳と古墳群の研究」に再録)。
 - (12) 北康宏「律令陵墓祭祀の研究」(『史学雑誌』第一〇八編一一号、一九九九年)。
 - (13) 前掲註(6)。
 - (14) 守戸については、延喜式諸陵式にのみ見える独自の表記法ではなく、『続日本紀』神龜元年十月壬寅条には、「前

律令陵墓制の特質について（石井）

略）又詔曰。登山望海、此間最好。不勞遠行、足以遊覽。故改弱浜名、為明光浦。宜置守戸、勿令荒穢。春秋二時、差遣官人、奠祭玉津嶋之神・明光浦之靈。（後略）」とみえる。この条文は、「明光の浦の風光を讀める詔」であるとされている（新日本古典文学大系『続日本紀』二、頭注（岩波書店、一九九二年一〇月）。このことから、「守戸」が、陵墓に限定されたものでないことが明らかになると考える。この条文に記された守戸の役割が、「勿荒穢」とされていること、さらに、「春秋二時、差遣官人」とされている点は、延喜諸陵寮式における守戸の役割と類似していると考えられることができる。この守戸の記載については、本稿とはやや趣旨を異にする問題を多く含むと考えることができる。したがって、後考を期して今後の課題としたい。

(15) 前掲註(5) 論文。

(16) 瀧川政次郎「陵戸考」(『史学雑誌』四三—三、一九三二年三月)。後に『律令諸制及び令外官の研究』に再録。

(17) 前掲註(9) 論文。

(18) 利光三津夫・長谷山彰「陵戸制に関する一考察(上)(下)」(『法学研究』五七—九・一〇、一九八四年九月)。同「唐制陵戸に関する一考察」(『法学研究』六五—五、一九九二年五月)。

(19) 『日本書紀』持統天皇三年六月庚戌条

(20) 利光三津夫・長谷山彰「陵戸制に関する一考察(上)(下)」(『法学研究』五七—九・一〇、一九八四年九月)。

(21) 狩野久「品部雑戸制の再検討」(『史林』四三—六、一九六〇年十一月)のちに「品部雑戸制論」として『日本古代の国家と都城』に再録。

(22) 新井喜久夫「官員令別記について」(『日本歴史』一六五、一九六二年三月)。大山誠一「官員令別記の成立をめぐる諸問題」(『日本歴史』三七二、一九八九年九月)。

(23) 植松考穆「律令制に於ける品部雑戸の由来と大化改新」(『史観』一九、一九四九年)。和田軍一「諸陵寮式の研究(上)(下)」(『歴史地理』五三—二、一九二九年四月)。青木和夫「雇役制の成立」(『史学雑誌』六七—三・四、一九五八年三月・四月)。

(24) 和田萃「日本古代・中世の陵墓」(森浩一編『天皇陵古墳』大巧社、一九九六年)。

(25) 今尾文昭「新益京の借陵守について」(同志社大学考古シリーズ七『考古学に学ぶ—遺構と遺物—』一九九九年三月)。

(26) 平城京への遷都は、和銅元年に始まり、和銅二年には元明天皇により遷都の詔が出され、和銅三年に遷都されたとされる。

(27) 大山氏前掲註(22) 論文。

(28) 押部佳周「日本律令成立の研究」(塙書房、一九八一年)。

(29) 前掲註(8) 参照。

(30) 青木和夫「律令国家の権力構造」(岩波講座『日本歴史』三、一九七六年三月。のちに『日本律令国家論攷』再録)。

(31) 八木充「律令賤民制論—その成立をめぐるノート—」(『山口大学文学会志』一八—二、一九六七年二月。後に「律令賤民制の成立」と改稿し「律令国家成立過程の研究」に再録)。

(32) 関晃「古代日本の身分と階級」(『古代史講座』七、一九六三年三月。のちに『関晃著作集—古代社会の構造(下)—』古代

における身分と階級』四に再録)。

- (33) 村岡薫「律令的良民制支配の特質」(『民衆史研究』一一、一九七三年五月)。

- (34) 新野直吉「陵戸論」(『日本歴史』三九三、一九八一年二月)。

- (35) 神野清一「陵戸身分の成立」(『律令国家と賤民』一九八五年二月)。

- (36) 升井正元「陵戸制成立過程に関する一考察」(『史流』二一、一九八〇年三月)。

- (37) 前掲註(19) 論文。

- (38) 瀧川政次郎「雑戸と陵戸との異同に就いて」(『国学院雑誌』三六一、一九三〇年一月)。同前掲註(16) 論文。

- (39) 新野直吉「陵戸と官戸」(『国史談話会雑誌』三、一九五八年十一月)。

- (40) 前掲註(16) 論文。

- (41) 濱口重國「唐の陵・墓戸の良賤に就いて」(『史学雑誌』四十三、一八、一九三二年八月)。のちに『唐王朝の賤人制度』に所収。

- (42) 広池千九郎訓点、内田智雄補訂『大唐六典』(広池学園事業部、一九七三年十二月)。

- (43) この点について、利光・長谷川論文では、「開元二十五年当時」と記されているが、『大唐六典』の成立過程及び内容を考慮すれば、開元七年当時とすることが正しいであろう。

- (44) 利光三津夫・長谷山彰「唐制陵戸に関する一考察」(『法学研究』六五、一五、一九九二年五月)。

- (45) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査出土木簡概報」(六)(一九六九年三月)。

- (46) 虎尾俊哉「令集解考証三題」(同『古代典籍文書論考』、

一九八二年三月)。

- (47) 前掲註(19) 論文。

- (48) 前掲註(35) 論文。(『史流』二一、一九八〇年三月)。

- (49) 押部氏前掲註(27)。井上光貞「日本律令の成立とその注釈書」(日本思想大系『律令』解説)。

- (50) 神野清一「陵戸身分の成立」(『律令国家と賤民』一九八五年二月)。

- (51) 榎本淳一「律令賤民制の構造と特質」(池田温編『中国礼法と日本律令制』、一九九二年三月)。同「日唐賤民の身分意識について」(笹山晴生編『日本律令制の構造』二〇〇三年五月)。

- (52) 瀧川政次郎「雑戸と陵戸との異同に就いて」(『国学院雑誌』三六一、一九三〇年一月)。前掲註(16) 論文。

- (53) 前掲註(18) 論文。

- (54) 日本思想大系『律令』頭注(岩波書店、一九七六年十二月)。

- (55) 陵戸との官戸の身分的な上下関係の考察は、このような視点が前提となり展開している。新野氏前掲註(34) 及び、利光・長谷川氏前掲註(18) 論文。参照。

- (56) 瀧川政次郎「中古賤民の等級に就いて」(『史学雑誌』三五、一五、一八、一九二四年五月・八月)。のちに『律令賤民制の研究』に再録。

- (57) 前掲註(51) 及び(52)。

- (58) 前掲註(50) 論文。

- (59) 前掲註(19) 論文。

- (60) 『古事類苑』神祇部一(古事類苑刊行会、一九三二年)。

- (61) 熊田亮介「神戸について」(『文化』三八、一三、四、一九七五年三月)。

律令陵墓制の特質について（石井）

- (62) 大関邦男「神戸についての試論」(『国学院雑誌』九五二、一九九四年二月)。
- (63) 小倉慈司「神戸と律令神祇行政」(『続日本紀研究』二九七、一九九五年六月)。
- (64) 『日本書紀』天武元年七月壬子条には、次のような記載がみえる。「(前略) 乃顯之曰、於神日本磐余彥天皇之陵、奉馬及種々兵器。便立言、吾者立皇御孫命之前後、以送奉于不破而還焉。今且立官軍中而守護之。且言、自西道軍衆將至之。宜慎也。言訖則醒矣。故是以、便遣許梅、而祭拜御陵、因以奉馬及兵器。(後略)」この条文は、陵に対する最初の祭祀であると考えられることができる。
- (65) 今尾氏前掲註(25) 論文参照。また、『日本書紀』持統七年三月己巳条には、詔造京司衣縫王等、収所掘戸。」とみえる。また、『続日本紀』和銅二年十月癸巳上には「勅造平城京司。若彼墳隴、見発堀者、隨即埋斂、勿使露棄。普加祭酹、以慰幽魂。」とみえる。
- (66) 拙稿「律令国家の喪葬—豪族の喪葬権の行方—」(『史苑』第五七卷第一号、一九九六年一〇月)。同「喪葬遣使について」(『古代史研究』第十五号、一九九七年十一月)。同「律令国家の喪と葬について」(『古代史研究』第十九、二〇〇二年十一月古代史研究会)。

※陵墓表の「記号」は、次のようになる。

- A 已上神代三陵。於山城國葛野郡田邑陵南原祭之。其兆城東西一町。南北一町。
- B 右四十遠陵
- C 右一近陵

- D 右十三遠陵
- E 右一近陵
- F 右二遠陵。
- G 右三陵近陵
- H 右五遠陵
- I 右二近陵
- J 右一遠陵
- K 右三近陵
- L 右二遠陵
- M 右廿三遠墓
- N 右三墓不入頒幣之例
- O 右一近墓
- P 右十二遠墓
- Q 右七近墓
- R 右一遠墓

(立教小学校教諭・本学兼任講師)

番号 記号	陵墓名	被葬者名	「在」の記載	兆域	守衛者	その他の記載
001	A 日向埃山陵	天津彦彦火瓊瓊杵尊。	在日向國。		無陵戸。	
002	A 日向高屋山上陵	彦火火出見尊。	在日向國。		無陵戸。	
003	A 日向吾平山上陵	彦波瀲武鸕鷀草不韋合尊。	在日向國。		無陵戸。	
004	B 欽傍山東北陵	欽傍橿原宮御宇神武天皇。	在大和國高市郡。	兆域東西一町。南北一町。	守戸五烟。	
005	B 桃花鳥田丘上陵	葛城高丘宮御紽靖天皇。	在大和國高市郡。	兆域東西一町。南北一町。	守戸五烟。	
006	B 欽傍山西南御藤井上陵	片鹽浮穴宮御宇安寧天皇。	在大和國高市郡。	兆域東西三町。南北二町。	守戸五烟。	
007	B 欽傍山南織沙溪上陵	輕曲峽宮御宇懿德天皇。	在大和國高市郡。	兆域東西六町。南北六町。	守戸五烟。	
008	B 掖上博多山上陵	掖上池心宮御宇孝昭天皇。	在大和國葛上郡。	兆域東西六町。南北六町。	守戸五烟。	
009	B 玉手丘上陵	室秋津嶋宮御宇孝安天皇。	在大和國葛上郡。	兆域東西六町。南北六町。	守戸五烟。	
010	B 片丘馬坂陵	黑田盧戸宮御宇孝靈天皇。	在大和國葛下郡。	兆域東西五町。南北五町。	守戸五烟。	
011	B 鈿池嶋上陵	輕境原宮御宇孝元天皇。	在大和國高市郡。	兆域東西二町。南北一町。	守戸五烟。	
012	B 春日率川坂上陵	春日率川宮御宇開化天皇。	在大和國添上郡。	兆域東西五段。南北五段。	以在京戸十烟。每年差充令守。	
013	B 山邊道上陵	磯城瑞籬宮御宇崇神天皇。	在大和國國城上郡。	兆域東西二町。南北二町。	守戸一烟。	
014	B 菅原伏見東陵	繼向珠城宮御宇垂仁天皇。	在大和國國添下郡。	兆域東西二町。南北二町。	陵戸二烟。守戸三烟。	
015	B 山辺道上陵	繼向日代宮御宇景行天皇。	在大和國國城上郡。	兆域東西二町。南北二町。	陵戸一烟。	
016	B 狹城盾列池後陵	志貫高穴秘宮嶋成務天皇。	在大和國國添下郡。	兆域東西二町。南北三町。	守戸五烟。	
017	B 惠我長野西陵	六門豐浦宮御宇仲哀天皇。	在河内國志紀郡。	兆域東西二町。南北二町。	陵戸一烟。守戸四烟。	
018	B 狹城盾列池上陵	磐余稚櫻宮御宇神功皇后。	在河内國添下郡。	兆域東西二町。南北二町。	守戸五烟。	
019	B 惠我長野西陵	輕嶋明宮御宇心神天皇。	在河内國志紀郡。	兆域東西五町。南北八町。	陵戸五烟。守戸三烟。	
020	B 惠我長野西陵	難波高津宮御宇仁德天皇。	在和泉國大鳥郡。	兆域東西八町。南北八町。	陵戸五烟。	
021	B 百舌鳥耳原南陵	磐余稚櫻宮御宇履中天皇。	在和泉國大鳥郡。	兆域東西五町。南北五町。	陵戸五烟。	
022	B 百舌鳥耳原北陵	丹比柴籬宮御宇反正天皇。	在和泉國大鳥郡。	兆域東西三町。南北二町。	陵戸五烟。	
023	B 惠我長野西陵	遠飛鳥宮御宇允恭天皇。	在河内國志紀郡。	兆域東西二町。南北二町。	陵戸一烟。守戸四烟。	
024	B 菅原伏見西陵	石上六穗宮御宇安康天皇。	在河内國添下郡。	兆域東西二町。南北三町。	守戸三烟。	
025	B 丹比高鷲原陵	泊瀬朝倉宮御宇雄略天皇。	在河内國丹比郡。	兆域東西二町。南北二町。	陵戸四烟。	
026	B 河内坂門原陵	磐余穗栗宮御宇清寧天皇。	在河内國古市郡。	兆域東西二町。南北三町。	陵戸四烟。	
027	B 傍丘磐杯丘南陵	近飛鳥入鈿宮御宇顯宗天皇。	在大和國葛下郡。	兆域東西二町。南北三町。	陵戸一烟。守戸三烟。	
028	B 傍丘坂本陵	石上廣高宮御宇仁賢天皇。	在河内國丹比郡。	兆域東西二町。南北三町。	守戸五烟。	
029	B 傍丘磐杯丘北陵	泊瀬列城宮御宇武烈天皇。	在大和國葛下郡。	兆域東西二町。南北三町。	守戸五烟。	
030	B 三嶋藍野陵	磐余玉穗宮御宇繼體天皇。	在摂津國嶋上郡。	兆域東西三町。南北三町。	守戸五烟。	
031	B 古市高屋丘陵	勾金橋宮御宇安閑天皇。	在河内國古市郡。	兆域東西一町。南北一町五段。	陵戸一烟。守戸二烟。	

律令陵墓制の特質について（石井）

032	B	身狭桃花鳥坂上陵	檜隈廬入野御宇宣化天皇。	在大和國高市郡。	兆城東西二町。南北二町。	守戸五畑。	
033	B	檜隈坂合陵	磯城嶋金刺宮御宇欽明天皇。	在大和國高市郡。	兆城東西四町。南北四町。	守戸五畑。	
034	B	河内磯長中尾陵	譚語田宮御宇敏達天皇。	在河内國石川郡。	兆城東西三町。南北三町。	守戸五畑。	
035	B	河内磯長原陵	磐余池邊列槻宮御宇用明天皇。	在河内國石川郡。	兆城東西二町。南北三町。	守戸三畑。	
036	B	倉梯岡陵	倉梯宮御宇崇峻天皇。	在大和國十市郡。	無陵地并陵戸。		
037	B	磯長山田陵	小治田宮御宇推古天皇。	在河内國石川郡。	陵戸一畑。守戸四畑。		
038	B	押坂内陵	高市崗本御宇舒明天皇。	在大和國城上郡。	兆城東西二町。南北二町。	陵戸三畑。	
039	B	大坂磯長陵	難波長柄豐碯宮御宇孝德天皇。	在河内國石川郡。	兆城東西九町。南北六町。	守戸三畑。	
040	B	越智岡上陵	飛鳥川原宮御宇皇極天皇。	在大和國高市郡。	兆城東西五町。南北五町。	陵戸五畑。	
041	C	山科陵	近江大津宮御宇天智天皇。	在山城國宇治郡。	兆城東西十四町。南北十四町。	陵戸五畑。	
042	D	檜隈大内陵。	飛鳥淨御原宮御宇天武天皇。	在大和國高市郡。	兆城東西五町。南北四町。	陵戸五畑。	
043	D	同大内陵。	藤原宮御宇持統天皇。	合葬檜前大内陵。	々戸更不重充。		
044	D	眞弓丘陵。	岡宮御宇。天皇。	在大和國高市郡。	兆城東西二町。南北二町。	陵戸六畑。	
045	D	檜前安占岡上陵。	藤原宮御宇文武天皇。	在大和國高市郡。	兆城東西三町。南北三町。	陵戸五畑。	
046	D	奈保山西陵。	平城宮御宇元明天皇。	在大和國添上郡。	兆城東西三町。南北五町。	守戸五畑。	
047	D	奈保山西陵。	平城宮御宇淨足姬天皇。	在大和國添上郡。	兆城東西十二町。南北十二町。	守戸四畑。	
048	D	佐保山西陵。	平城宮御宇上皇太后藤原氏。	在大和國添上郡。	兆城東西四段。西七町。南北七町。	守戸五畑。	
049	D	佐保山南陵。	平城朝皇太后藤原氏。	在大和國添上郡。	兆城東西三町。西四段。南北七町。	守戸五畑。	
050	D	淡路陵。	廢帝。	在淡路國三原郡。	兆城東西六町。南北六町。	守戸一畑。	
051	D	高野陵。	平城宮御宇天皇。	在大和國添上郡。	兆城東西五町。南北三町。	守戸五畑。	
052	D	田原西陵。	春日宮御宇。天皇。	在大和國添上郡。	兆城東西九町。南北九町。	守戸五畑。	
053	D	吉隱陵。	皇太后紀氏。	在大和國城上郡。	兆城東西八町。南北九町。	守戸五畑。	
054	E	田原東陵。	平城宮御宇天宗高紹天皇。	在大和國智郡。	兆城東西一町一段。西九段。	守戸一畑。	
055	F	字智陵。	皇后井上内親王。	在大和國智郡。	兆城東西一町一段。西九段。	守戸五畑。	
056	F	大枝陵。	太皇太后高野氏。	在山城國乙訓郡。	兆城東西一町一段。西九段。	守戸五畑。	
057	G	柏原陵	平安宮御宇桓武天皇。	在山城國紀伊郡。	兆城東西八町。西三町。南五町。	守戸五畑。	
058	G	高皇陵	皇太后藤原氏。	在山城國乙訓郡。	兆城東西三町。西五町。南三町。	守戸五畑。	
059	G	八嶋陵	崇道天皇。	在大和國添上郡。	兆城東西四町。南北四町。	守戸二畑。	
060	H	河上陵	贈皇后藤原氏。	在大和國添上郡。	兆城東西四町。南北四町。	守戸五畑。	
061	H	宇波多陵	贈皇太后藤原氏。	在山城國乙訓郡。	兆城東西四町。南一町。北三町。	守戸五畑。	

083	M	宇度墓	五十瓊敷入彦命。	在山城國乙訓郡。	兆城東西三町。南三町。北六町。	守戸五烟。	不入頒幣之例。
082	M	押坂墓	田村皇女。	在山城國葛野郡。	兆城東西六町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
081	M	成相墓	押坂彦人大兄皇子。	在山城國葛野郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸五烟。	
080	M	息長墓	舒明天皇之祖母名曰廣姫。	在山城國葛野郡。	兆城東西一町。南二町。北五町。	守戸五烟。	
079	M	磯長原墓	石姫皇女。	在山城國葛野郡。	兆城東西四町。南三町。北六町。	守戸五烟。	
078	M	龜山墓	彦五瀬命。	在山城國葛野郡。	兆城東西一町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
077	M	倉田墓	手白香皇女。	在山城國紀伊郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
076	M	古市高屋墓	春日山田皇女。	在山城國紀伊郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
075	M	墳口墓	飯豐皇女。	在山城國紀伊郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
074	M	能褒野墓	日本武尊。	在山城國紀伊郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
073	L	後深草陵	中宮藤原氏。	在山城國紀伊郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
072	L	白河陵	太皇太后藤原氏。	在山城國愛宕郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
071	K	小野陵	贈皇太后藤原氏。	在山城國宇治郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
070	K	後田邑陵	光孝天皇。	在山城國葛野郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
069	K	中尾陵	贈皇太后藤原氏。	在山城國愛宕郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
068	J	後山科陵	太皇太后藤原氏。	在山城國宇智郡。	兆城東西四町。南三町。北六町。	守戸五烟。	
067	I	田邑陵	平安宮御宇文德天皇。	在山城國葛野郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
066	I	深草陵	平安宮御宇仁明天皇。	在山城國紀伊郡。	兆城東西一町。南二町。北五町。	守戸五烟。	
065	H	楊梅陵	平安宮御宇日本根子推國高彦尊天皇。	在山城國紀伊郡。	兆城東西二町。南二町。北五町。	守戸五烟。	
064	H	嵯峨陵	太皇太后橘氏。	在山城國葛野郡。	兆城東西六町。南二町。北五町。	守戸三烟。	
063	H	石作陵	贈皇后高志内親王。	在山城國乙訓郡。	兆城東西三町。南三町。北六町。	守戸五烟。	

律令陵墓制の特質について（石井）

084	M	宇治墓	菟道稚郎皇子。	在山城國宇治郡。	兆城東西十二町。南北十二町。	守戸三烟。	
085	M	押坂內墓	大伴皇女。	在大和國城上郡。押坂內。	兆城東西五町。南北五町。	無守戸。	
086	M	片岡葦田墓	茅渟皇子。	在大和國葛下郡。陵城內。	兆城東西五町。南北五町。	無守戸。	
087	M	檜隈墓	吉備姬王。	在大和國高市郡。檜隈內。	兆城東西三町。南北二町。	無守戸。	
088	M	磯長墓	橘豐日天皇之皇太子。名云聖德。	在河內國石川郡。押坂內。	兆城東西三町。南北二町。	無守戸。	
089	M	押坂墓	鏡女王。	在大和國廣瀨郡。陵城內東南。	兆城東西六町。南北四町。	無守戸。	
090	M	三立岡墓	高市皇子。	在大和國廣瀨郡。	兆城東西一町。南北一町。	無守戸。令橘列池上陵戸兼守。	
091	M	平城坂上墓	磐之媛命。	在大和國添上郡。	兆城東西二町。南北二町。	守戸正丁五人。	
092	M	淡路墓	當麻氏。	在淡路國三原郡。	兆城東西三町。南北五町。	守戸一烟。	
093	M	牧野墓	太皇太后之先和氏。	在大和國廣瀨郡。	兆城東西三町。南北二町。	守戸一烟。	
094	M	大野墓	太皇太后之先大枝氏。	在大和國平群郡。	兆城東西三町。南北二町。	守戸一烟。	
095	M	阿施墓	贈太政大臣藤原朝臣良繼。日本根子推國高彥尊天皇外祖父。	在大和國平群郡。	兆城東西三町。南北二町。	守戸一烟。	
096	M	村國墓	贈正一位安倍命婦。同天皇外祖母。	在大和國添下郡。	兆城東西四町。南北五町。	守戸一烟。	
097	N	平群郡北岡墓	山背大兄王。	在大和國平群郡。	兆城東西三町。南北二町。	墓戸二烟。	
098	N	龍田清水墓	間人女王。	在大和國平群郡。	兆城東西三町。南北二町。	墓戸二烟。	
099	N	龍田苑部墓	石前王女。	在大和國平群郡。	兆城東西二町。南北二町。	墓戸二烟。	
100	O	多武岑墓	贈太政大臣正一位淡海公藤原朝臣。	在大和國十市郡。	兆城東西十二町。南北十二町。	無守戸。	国史並貞觀式云大織冠墓云々今文已遠式誤也。
101	P	後阿施墓	贈太政大臣正一位藤原朝臣武智麻呂。	在大和國宇智郡。	兆城東西十五町。南北十五町。	守戸一烟。	
102	P	相樂墓	贈太政大臣正一位藤原朝臣百川。湊和上天皇外祖父。	在山城國相樂郡。	兆城東西三町。南北二町。	守戸一烟。	
103	P	後相樂墓	贈正一位藤原氏。同天皇外祖母。	在山城國相樂郡。贈太政大臣墓內。	兆城東西三町。南北二町。	無守戸。	
104	P	巨幡墓	贈一品伊豫親王。	在山城國宇治郡。	兆城東西一町。西一町五段。南二町。北三町。	守戸一人。	
105	P	加勢山墓	贈太政大臣正一位橘朝臣清友。仁明天皇外祖父。	在山城國相樂郡。	兆城東西四町。南北六町。	守戸一烟。	
106	P	小山墓	贈正一位田口氏。同外祖母。	在河內國交野郡。	兆城東西三町。南北五町。	守戸二烟。	
107	P	後宇治墓	贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣。文德天皇外祖父。	在山城國宇治郡。	兆城東西十四町。南北十四町。	守戸二烟。	

史苑（第六七卷一號）

R Q P O N M L K J I H G F E D C B A

已上神代三陵　於山
右四三遠陵
右近陵
右十三遠陵
右二遠陵
右一遠陵
右三陵近陵
右五遠陵
右二遠陵
右三近陵
右二遠陵
右三遠墓
右二遠墓不入頒幣之例
右近墓
右十三遠墓
右七近墓
右一遠墓

108	P	贈正一位藤原氏。同天皇外祖母。	在山城國宇治郡 政大臣墓內。 贈太			
109	P	贈正一位源氏。清和太上天皇外祖母。	在山城國愛宕郡。	兆城東二町。南二町。西一町五段。北町五段。		守戸一烟。
110	P	桓武天皇夫人從三位藤原氏。	在山城國葛野郡。大岡郷。			守戸一人。
111	P	太政大臣贈正一位美濃公藤原朝臣。	在山城國愛宕郡。			守戸一烟。
112	P	贈正一位藤原氏。陽成天皇外祖母。	在山城國紀伊郡。			守戸一烟。
113	Q	贈一品太政大臣仲野親王。	在山城國葛野郡。			墓戸一烟。
114	Q	贈正一位當宗氏。	在山城國葛野郡。			墓戸一烟。
115	Q	贈正一位藤原氏。	在山城國愛宕郡八坂郷。	墓地十町。		墓戸一烟。
116	Q	贈正一位藤原朝臣總繼。	在山城國愛宕郡。鳥戸郷。	墓地四町。		墓戸一烟。
117	Q	太政大臣正一位藤原朝臣。	在山城國宇治郡。小野郷。			墓戸一烟。
118	Q	贈太政大臣正一位藤原朝臣高藤。	在山城國宇治郡。小野郷。			
119	Q	贈正一位宮道氏。	在山城國宇治郡。小野郷。			
120	R	贈太政大臣正一位藤原朝臣時平。	在山城國宇治郡。			墓戸一烟。

Specific feature on Ritsuryo Ryobo System -through consideration over Ryoko-

by ISHII, teruyoshi

律令陵墓制の特質について
(石井)

This thesis discusses how characteristic Ritsuryo Ryobo system is with a closer look on Ryoko, the guard of Ryobo. It is no exaggerating to say that studies on Ryobo system has mainly been focusing on and developed through the detailed investigation and analysis of Engi horyoryou Shiki. These studies show that the biggest epoch-making influence on Ritsuryo Ryobo System is the enactment of Asuka kiyomihararyo or Taihoryo. It could be said that these studies have over looked and failed to estimate the impact of the establishment of Engi shoryoryou shiki, or konin shiki or jougan shiki which were said to be consulted on when editing Engi shoryoryou shiki.

Yoro ryo designates Ryoko as one of the Five Lowlies. Accepted theory that the recent studies hold tells us that Taihoryo, on the other hand, did not specify Ryoko as the lowly. It should be explained that there was an alteration in accordance with the social status of Ryoko, the guard of Ryobo; a fundamental change in the Ritsuryo Caste system. Could this constitutional rearrangement of the Caste brought about to Ryoko have nothing to do with Ryobo system? By attempting to answer this question, this thesis will deal with the distinctive aspect of Ryobo system with a close look on the social status of Ryoko.